阪神高速の取り組み

阪神・淡路大震災から30年、被災経験を決して風化させない
つないでいく1・17

阪神・淡路大震災が起きたのは1995年1月17日。2025年は発災後30年という節目の年を迎えます。経験したことのない都市直下型の大地震により、多くの命や建物、インフラが破壊され、阪神高速道路も甚大な被害を受けました。阪神高速道路(株)では被災経験と教訓を生かし、技術開発や災害対応業務、防災教育などさまざまな取り組みが行われています。そのひとつである「震災資料保管庫」は後世に語り継ぐ防災関連の施設として、安全・安心の原点を広く呼びかけています。「つないでいく1・17」について担当者にお話をお聞きしました。

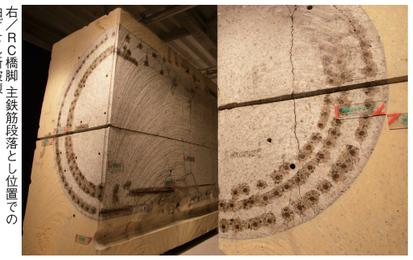
被災経験や復旧の足跡を次代につなぐ

西出浩明さん
阪神高速道路(株)技術部技術企画課 課長

私は1995(平成7)年入社なので、震災のあった1月17日はまだ学生の身分でした。卒業に向け論文の執筆に追われていた時期。数日間泊まり込む覚悟で、前日の夜遅く、ゼミ室に到着しました。論文執筆の後、雑魚寝状態でまどろんでいると、ドンという縦揺れと激しい横揺れに襲われ、目が覚めました。あたりは真っ暗で何が起こったかわからず、外に出てキャンパスから市街地を一望すると、火災のようなものがあちらこちらで発生しているではないですか。神戸市内に住むゼミ仲間が心配になり、友人と一緒に車で街の中心部に向かいました。学校を出てすぐに血を流し毛布にくるまって歩いている親子を見かけ、近くの病院まで送りました。いきなり深刻な場面に遭遇し、ただただ驚きましたが、国道43号に到達するまで地獄のような光景の連続でした。燃えている家屋や住民を助けようとしている人たち、倒壊した家屋、傾いたビル……六甲山中腹から南下するにつれ、被害が著しく、鉄道のアンダーパスにかかる桁は落下しており、通過できそうなところを探し回りました。道路のいたるところに段差ができ、ガス臭もひどかったです。なんとか国道43号の新在家交差点に到達し、阪神高速の高架下を東へ向かいましたが、高速道路の橋脚が随所にひび割れており、住吉川付近まで行くと道路の段差が激しく、魚崎ランプが大きく傾いているのを見て、これ以上進むのは危険と判断し、引き返しました。結果的に深江地区のピルツ橋倒壊現場には遭遇しておらず、テレビで見たときは大きなショックを受けました。友人の無事を確認した帰り、近隣の方と少しおしゃべりする機会がありました。「この道路公団に就職する予定ですが、心配なんです」と言うと「阪神高速か、そりゃ大変や。大事な道路なんやから、頼むで。就職したら頑張ってや」と励まされたことは今でもはっきり覚えています。

このような経験をした私が現在、震災資料保管庫の運営・管理を担当しています。これまで先輩社員より「自然は必ず人知を超える。畏敬の念を持って接すべし」との教えを頂きました。被災直後の緊迫した空気を肌で知っている人間として、震災復旧を経験した先輩社員と未経験の地域のみなさまや弊社社員の双方をつないでいくのが私に与えられた使命だと考えています。

震災資料保管庫は「地震で失ったもの、伝えるべきもの、そして活かさなければならないもの」をテーマとしています。被災経験により得られた人間の英知がこの施設によって情報の伝達と共有が行われ、今後の防災・減災につながることを願っています。また、623日という短期間で復旧を成し遂げた先輩社員の足跡についても、リアリティをもって伝えていきたいと思っています。



右／RC橋脚・主鉄筋段落とし位置での曲げせん断破壊（円形）の局部座屈・破断われ
上右／鋼製橋脚の端横桁の変形
上左／アーチ橋の端横桁の変形

右／鋼連続箱桁橋の主桁の座屈
上／RC橋脚のせん断損傷

被災・復旧経験を自分事に、意識の変革を

寺村拓也さん
阪神高速道路(株)技術部技術企画課 主任

私は、滋賀県出身で、震災当時は小学生だったこともあり、テレビの中で道路が横倒しになっている映像を見ても、どこか遠くの世界で起きている出来事としてとらえていたのを記憶しています。十数年が経ち、入社後の新入社員研修で震災資料保管庫を訪れ、ようやく小学生の時に見た「高速道路が倒れた会社」に自分が入社したのだなということを実感し、改めて見る被災構造物に地震エネルギーの凄まじさを感じたことを覚えています。

現在の部署に異動したのは、2024年7月。保管庫の運営に携わっている部署であることから、様々な方に保管庫を案内する機会があります。震災当時や入社時には漠然とした印象しかもっていなかった阪神高速道路の被災・復旧経験について、この機会に学び触れることによって、リアルな"自分事"として捉えることができてきました。

私もそうですが、1995年以降に入社した、震災を社員として経験していない、復旧に携わっていない社員が8割近くを占めた今、震災を通じて得た経験や知識を若い世代に継承していくことが急務となっています。現在、復旧に携わった社員の話や被災・復旧資料、映像のアーカイブ化などを進めていますが、被災・復旧経験を途切れさせることなく継承していくには、社員一人ひとりがそれらの資料などを通じて"自分事"として捉えることが重要だと考えています。なので、今後は、そのような研修や議論をする機会を創出することで被災・復旧経験を風化させることなく、「1・17」をつないでいくことに力を入れていきます。

参加費無料

「震災資料保管庫」特別開館

2025年1月11日(土)、12日(日) 9:30〜16:30(最終受付16:00)
参加費無料(事前申し込み不要)

甚大な被害に遭った阪神高速道路の被災構造物を保管・展示している「震災資料保管庫」を特別開館します。DVD上映や震災後の撤去・復旧に携わった社員、経験を継承する社員の講演会、館内のご案内等を企画しています。両日「人と防災未来センター」への無料シャトルバスも運行します。この機会にぜひ、ご来場ください。

震災資料保管庫についてはこちらから

「つないでいく1.17」特設ウェブサイト開設

阪神高速では、震災30年を機に、特設ウェブサイト「つないでいく1.17」を開設しました。これからも阪神高速は被災と復旧の記録、防災・減災に関する取り組みについて広く発信していきます。

「つないでいく1.17」特別ウェブサイトはこちらから